

「本日の感染者は、5674名です…」  
 こういう日が来てしまうのか？と、想像  
 してみるが、いかにカウント好きな日本メ  
 ディアでも、桁が変わればさすがに飽きてし  
 まうだろう。

一方、インフルエンザはワクチンがあつて  
 も、「本日は105674名です」という日  
 が日常茶飯事だ。死者の数もCOVID-19  
 の3倍以上にのぼるが、日々テレビでカウ  
 ントされることはない。その他、結核や腸管感  
 染症の死者数も是非カウントしてみてもどう  
 だろう。

治療の様子もリアルタイムで発信し、専門  
 家と称するテレビゲストに解説もお願いした  
 い。COVID-19のテレビ報道では、原発  
 事故のそれと同じく、専門家の幅がありすぎ  
 て、自説が180度異なっている場合も少な  
 くない。中身はともかく、とりあえず政府批  
 判と状況の悪化を吹聴しておけば間違いな  
 いのも失笑の素だ。

不安を煽れば注目を浴び、衝撃的数字は国  
 民の関心と扇情を集める。いつの時代も怪し  
 い世論はこうして生まれるのだろう。

大本営発表のごとく、敵の数ばかりが速報  
 で目に入ると、不安ばかりが増長し、戦わな  
 ければ！と身構えてしまう。敵の数がわか  
 らなくては戦えない？確かにPCR検査は  
 有効な戦術の一つだが、100万人検査して  
 も出口戦略がなければ、混乱の素でしかない。  
 目に見える敵の姿だけに過剰反応し、敵の  
 狙いを見逃すと、長期的にはかえって大きな

## 過剰反応

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

ダメージを負ってしまったことは、先の大戦で  
 痛いほど経験したはずだ。

敵の意図を見誤ると、その戦いは長期化し、  
 泥沼にはまり、最期には敗れることもある。

人間社会は、民族や宗教、文化や地政など  
 多様な要因によりゾーニングされており、普  
 段は均衡を保っているが、ひとたび敵を認識  
 した途端、攻撃の意思が生まれ、均衡は崩れ  
 る。

その攻撃はときに暴走し、不要な戦いに足  
 を踏み入れ、新しい敵まで誕生させてしまう。

調和（講和）を目的としない戦闘は、いず  
 れ自身に跳ね返ってくるわけだ。

さて、COVID-19の重症化には、免疫  
 システムの過剰反応「サイトカインストーム」  
 が影響していると言われる。本来、カラダの  
 中に侵入した外敵を退治するコントロール機  
 能が過剰反応し制御不能に陥るわけだ。さら  
 に、撤退命令に耳を貸さない攻撃部隊が暴走  
 し不要な戦闘拡大を続けた結果、戦場は泥沼  
 と化し、收拾がつかなくなる。

なにせ得体の知れない敵だ。失敗と検証、  
 改善と実行を重ね、誤りを認めた時には後戻  
 りする冷静さが必要だ。「敵は増え続けてい  
 る！撲滅せよ！」と盲進する全体主義  
 はいずれ破綻し、脅威を過剰に煽る怪  
 しい世論は、戦争責任を負うことにな  
 る。

過剰な敵意や攻撃（反応）は、平穩  
 どころか、新たな社会脅威をもたらす  
 だろう。



### Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に「概説戦後学校教育」「武徳教育のすすめ」。



美楽での連載を束ねた百念撰集  
 「雲涯蒼天」  
 定価 700円  
 Amazonにて販売中